

専攻医
の主張

専攻医1年目、人生も振り返る

東広島医療センター 消化器外科 手嶋 真里乃

3年間の浪人を経て医学部へ入りました。高校時代までは(血迷って)音楽大学進学を志したため、そこからの進路変更、医学部への入学は大変苦勞いたしました。そんな私は、手を動かし表現する時に1番集中できる質で、外科を専攻したのも、極限に集中した際の、頭がメリメリ音をたてながらも、全身が空気のように軽く動く、そんな体感を求めたからでした。技術を極めることに憧れがあるのかもしれませんが。

専攻医1年目というのは、医師人生の中でも1つのターニングポイントであると思います。私はここ東広島医療センターで駆け出し外科医となりました。こちらで大変有り難いことに指導医に恵まれ、多くの疾患で執刀の機会をいただき、あらゆる面からのサポートと、熱心なご指導をいただいております。外科医としてあるべき姿勢、患者との向き合い方、学術面等々、良いパフォーマンスをするための準備がいかに大切か、非常に細やかに、ご指導いただいております。「良いパフォーマンスのための準備」は、私のこれまでの音楽経験においても常に課題でした。準備不十分では自信が得られず、余計な緊張、力みを生じ、良いパフォーマンスとはなりません。学生時代、たくさんの音楽活動をする中で表現することの難しさ、今のありったけを本番で発揮できることの希少さを思い知りました。自信のなさや余計な自意識、思考の癖、ひいては生き方そのものまで、それを

見る人、聴く人には伝わってしまうものです。その恐ろしさも、よくよく痛感する日々でした。この1年、準備不足、未熟であるが故に悔しい思いをすることがありました。反省ばかりの毎日です。うまくいかないことの方が多い中で、本当にこの道でよかったのか、在り方を問うこともあります。それでも、執刀中、集中し、良く見え、ちょうどよい脱力感の中安全に手術ができた時、自分が執刀した患者さんが、術後外来で晴れやかな姿で経過報告してくださる時、この道を選んで本当によかったと感じます。右の鼠経ヘルニアを治療した方が、「左が出てきた時にはまた先生に手術してほしい」そう言ってくださった時は駆け出しの身としては(こっそり泣くほど)うれしい限りでした。

音楽活動をしていた頃、常に自分ひとりと戦っていました。聞こえはいいですが、自己満足でしかなかったのです(これは音楽の在り方としては間違っていると今は思います)。医師とは、人を想い表現する職であると感じます。こんなにも人との関わり合いがみずみずしく、「担当患者」の存在が私に活力と責任感を与えてくれるとは思いがけないことでした。落ち込むことも多いですが、尊敬する指導医や、日々出会う新たな患者さんに恥じないよう、よりよいパフォーマンスを求めて、自己研さんを諦めない自分でありたいと思っています。



事業主は、労働者が労働災害にあつて休業・死亡した場合、所轄の労働基準監督署に「労働者死傷病報告」を提出しなければなりません。

労働災害に健康保険は使えない、使わない。

労働災害の受診は労災保険で！！

労災保険の請求手続きについては、まず最寄りの労働基準監督署へご相談ください。

広島労働局・労働基準監督署